

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

シンポジウム：デカルト哲学をめぐって： デカルトとパスカル：オーギュスト・コン トを手がかりにして

安孫子, 信 / ABIKO, Shin

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学

(巻 / Volume)

19

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

40

(発行年 / Year)

2023-12-29

デカルトとパスカル

——オーギュスト・コントを手がかりにして

安孫子 信

1

デカルト（一五九六—一六五〇）とパスカル（一六二三—一六六二）を対比させることは、めずらしいことではない。ただそれをオーギュスト・コント（一七九八—一八五七）を介して行うのはあまりないことかもしれない。なぜコントなのか。コントの哲学史上の位置からとなるが、その位置を、これもまためずらしいことになると思うが、西周（一八二九—一八九八）の言葉で確認してみたい。西周がオランダ留学（一八六二—一八六五）からの帰路に書いたと想定されている覚書、『開題門』には、哲学

ということ、西がオランダで学んだことが簡潔に記されている。西は以下のように記している。

「東土これを儒といい、西洲これをヒロソヒという、皆天道を明らかにし人極を立つるもの、その実は一なり。…これを東土に徴するに、…この道に功なし、…唯文運いまだ旺ならず、日新なるもただ乏しきのみ、それ西洲の若きは、世その人に乏しからず、タレスこれを東に唱え、ピタゴラスこれを西に興し、ソクラテスに基づき、プラトール、アリストテレスに盛んにして、ストイックに継ぎ、スカラスチックに衰う、乃ち、ベーコン、デカートに至り再びこれを振わす、新

ヒロソヒ問答に興る、クラク、ホップスの諸賢輩出す、カントに振るい、ヘーゲルに盛なり、余謂えらく宋儒とラシヨナリズムと、その説出入り有りと雖も見る所頗る相似たり、唯晩近に至り、ポジティビズム、據証確実、弁論明哲、將に大いに後学を補する有らんとす、是れ我が亜細亜の未だ見ざる所にして、オーギュスト・コント實にこれを首唱す、蓋し理を胸臆に取り、垠際有る無し、論大にして語詳なりと雖も、裨する所幾許ぞ、弁駁相継ぎ、支吾互いに発す、謂う所のヒロソヒのアナルキーに非ずや、これエンピリの力を不可とするゆえんのみ、^①」

哲学はここではまだ訳語なしで「ヒロソヒ」のままであり、ここでは「據証確実、弁論明哲」、つまり「經驗」と「論理」に則り、伝統哲学（形而上学）の空理・駄弁ゆえの「アナルキー」から脱しているということ、コントの実証哲学が西洋哲学の到達点と見なされている。すなわち、「宋儒とラシヨナリズムと、その説出入り有りと雖も見る所頗る相似たり」として、デカルト、カント、ヘーゲルの「ラシヨナリズム」（形而上学）が一蹴され、それに対して、実証哲学について「我が亜細亜の未だ見ざる所」として、そのアジアへの導入の必要が語られる。つま

り、西が「哲学」の名で日本に導入しようとしたのは実証哲学だったと言える。もしもそれが「ラシヨナリズム」（形而上学）ならば新しい言葉は不要であり、ただ「西洋の儒学」と呼べばよいと暗に示唆されている。こうして西の「哲学」、つまりは日本の哲学のことになるが、それは、コントの衝撃からのものだった。こうして西によって、コントは哲学の現代を開いた者と見なされている。そのコントの視点から、デカルトとパスカルを以下、見ていくことにしたい。

2

コントの「ポジティビズム」（実証哲学）のインパクトは、形而上学との断絶から来ている。ただ実証哲学が「科学の哲学」であるとして、形而上学も「科学の哲学」でありうるだろう。しかし形而上学が「科学についての哲学」であって「科学を基礎づける」（デカルトやカント）ことに向かうのに対し、実証哲学はそうではなくて「科学である哲学」である。コントはそのことを「ここ三世紀に固有なあらゆる偉大な科学的業績が自然に働き合うことによつて、この哲学は準備されてきた^②」と述べる。科学が自らの成功を踏まえ、自らを補い体系化して「真の哲学の尊

厳」を持つまでに自らを高めること、つまり科学が哲学と
なること、それが実証哲学の企図である。³ その作業は具
体的には、コントの「ここ三世紀の科学的業績が働き合う
ことよって」という言葉にあるように〈科学史〉を通じ
て遂行された。その際コントはこの〈科学史〉自身を一つ
の新しい科学として、「社会学」と名づけた（科学は優れ
て社会的営為である⁴）。科学は全体として哲学になるが、
科学にその全体性をもたらすのが〈科学史〉であり「社会
学」なのである。コントの実証哲学のそのような本質を、
次のニーチェの言葉は見事に言い当てている。「科学的方
法の歴史は、コントによってほとんど哲学自身と見なされ
た。⁵」

さてそれ自身、実証科学であるコントの「社会学」は二
つの実証法則を導くが、それが「三状態の法則」と「分類
の法則」である。前者は、人間の知識が「神学的」↓「形
而上学的」↓「実証的」の三段階を経て進歩することを説
く。後者は、人間の知識が、扱う現象の単純さ複雑さに
従って、「数学」・「天文学」・「物理学」・「化学」・「生物
学」・「社会学」の六科学に分類されることを説く。ここで
は「三」や「六」といった数に囚われる必要はあまりな
く、重要なのは、「三状態の法則」に従えば、人間の知識
は不変的・絶対的ではなく、可変的・相対的だということ

であり、また、「分類の法則」に従えば、人間の知識は普
遍的・一元的ではなく、多元的で差異に開かれているとい
うことである。こうして、二つのフヘン性（不変性と普遍
性）を掲げる形而上学は退けられることになる。

さて、以上のことを、人間の精神の歴史全体にわたって
詳論したのがコントの名著『実証哲学講義』6巻
（一八三〇—一八四二）である。そして、この『講義』の
中で、デカルトとパスカルがどう語られているのかを一瞥
するのが以下の作業となる。

3

コントのデカルトに対する態度は是々非々と呼びうる。
コントはデカルトに科学者と形而上学者とを見て、前者を
取り後者は退ける。こうして、デカルトの「解析幾何学」
を語るが「コギト・エルゴ・スム」は語らないということ
が生じてくる。科学者デカルトに対するコントの評価は絶
大である。コントは科学者デカルトを実証哲学の先駆者と
見なす。

「実証哲学の精神がこの世界に姿をはっきりと現した
時期として私が指摘したいのは、ベーコンが規則を、

デカルトが構想 (conceptions) を、ガリレオが発見をもたらし、それらがあいまって働いて、今から二世紀前に、人間精神に大きな変動が刻印されたその時代である^⑥」

改めて言えば、ここで「デカルトの偉大な構想^⑦」と言われるのは「コギト・エルゴ・スム」ではなくて「解析幾何学」である。その解析幾何学については次のように語られている。

「幾何学にこの上なく広い領野を開き、同時に解析にこの上なく幸福な進路を開いて、ついに、抽象と具体との基礎的な関係を組織化した。この関係がなければ、数学的探究は脈絡のない不毛な活動に向かうことになる^⑧」

ここでは幾何学という、具体的で未整理にとどまっている数学の部分に、計算という、整理され抽象化されている数学の部分が、整理の道具として適用される。それは「合理的な実証性の最初の決定的な発露^⑨」であって、ここに「関数」と呼ぶ数学的操作の「構想」が生まれた。ただ、実はこのときデカルト自身、コントが実証哲学の方法と見る

〔科学史〕に従っていたということは留意される。『方法序説』第一部でデカルトは自身の「学校の勉強」に触れて次のように述べている。

「私はとりわけ数学が気に入っていた。その推理の確実性と明証性とのゆえに。そして、…その基礎がこのようにしつかりとして動かぬものであるにもかかわらず、いままでその上にもっと高い建物をだれも建てなかつたことを不思議に思っていた^⑩」。

デカルトの解析幾何学は純粹知性の産物ではなかつた。それは、〔科学史〕〔学校の勉強〕で確認される数学の成功をさらに体系化しようとしたその結果である。さて、コントは科学者デカルトについては、その他では、スネルとほぼ同時になされた光学における「屈折の法則^⑪」の発見と、潮汐論における月の運行と潮汐との恒常的関係の指摘^⑫に触れるだけである。

4

科学者デカルトの評価がこのようであるとして、形而上学者デカルトについてはどうであろうか。コントは形而上

学者デカルトについてはほぼまったく語らない。ただ、デカルトを名指すことなく、デカルト形而上学のテーゼは明確に退けていると言える。四つをあげてみたい。

〔合理論批判〕 コントは、実証的知識について、「真に到達可能であり人間の現実的必要に正しく相応した知識の唯一可能な基礎は、観察である」と語り、また、「個別的あるいは一般的事実の単なる叙述に還元されないいかなる命題も、現実的で理解可能な意味を持たない」と主張する。観察や経験的事実の不可欠を説くこの経験論の立場は、「精神のみによる洞見」(『省察』第二)¹⁴を言うデカルトの純粹理性の立場とは相容れない。

〔實在論批判〕 コントは、実証的知識について、「人間の成熟を特徴づける根本的革命は、本質的に、いわゆる原因なるものの到達不可能な決定の代わりに、至るところで、法則の、すなわち観察された現象間に存在する恒常的な関係の、単なる探究を行うことに存する」とする。¹⁵原因は求めず現象法則だけを求めよという現象主義の立場である。これは「全面的懐疑」(『省察』第一)¹⁶によって現象レベルの知識を打ち砕いて、真實在に到達しようとするデカルトの實在論の立場とは相容れない。

〔絶対主義批判〕 コントは、一八一八年五月一五日付の友人ヴァーラへの手紙で、「この世界に絶対的なものは何も

存在しない。すべては相対的である」¹⁷と相対主義の宣言を行い、それ以来、「絶対なるものをいたるところで相対によって置き換える必然的な傾向」¹⁸を追求していく。科学についても「科学理論は必然的に動的性質を持ち、あらゆる絶対の要求を退ける」¹⁹とする。このような知識の相対性を説く立場は、「アルキメデスの確固不動の一点」(『省察』第二)²⁰を求めたデカルトの絶対確実の立場とは相容れない。

〔普通数学批判〕 コントは、デカルトの名前は出さないが、デカルトが考えた「普通数学」を「悪しき形而上学的ユートピア」と見なした。²¹ コントによれば幾何学、力学を超えては熱学にまでは数学化を及ぼしえようが、将来とも、生物学はもちろんのこと、化学にも数学化は及ぼしえないと考えた。²² コントは、「過去二世紀の間に自然の普遍的な説明を求めてなされたあらゆる試みは、ただそのような企てが徒勞であると教えただけであった。今日では、誤った教養の持ち主だけがそのような道に迷い込む。正しく外界の探索を行えば、われわれが想定し、期待するほどには外界が連結していないとわかる」²⁴と述べる。

こうしてコントはデカルト形而上学の諸々のテーゼを退ける。ただそうしつつ、コントはデカルトの名前は出しておらず、デカルトその人への評価はぼかされている。コントは形而上学者デカルトその人には何を言うことになるのか。それを以下では、コントがパスカルについて語っている言葉の検討を通じて探ってみたい。コントは何度かパスカルの名前を出し、パスカルの主張の意味を語るが、もしそこでコントがパスカルを賞賛するとすれば、それはそれだけデカルトを非難していることになるであろう。パスカルの徹底したデカルト批判は知られている。

「無益で不確実なデカルト」⁽²⁶⁾

『実証哲学講義』6巻中にパスカルへの重要な言及が三か所見出される。そこでコントが取り上げるのは一般にはあまり語られないパスカルである。コントは自身にかなうパスカルの社会論を取り出してきているのである。

第一のパスカルへの言及（『実証哲学講義』第4巻第47講中⁽²⁶⁾）では、〈進歩〉が問題となる。

その箇所ではコントは、「進歩」(Progression)の考えは、科学の歩みの先頭に立つ数学的精神によってまず思いつかれたと述べた後で、「疑いの余地のないことではあるが、諸科学の進歩の感情、ただそれだけが、パスカルに、〈長い世紀の過ぎゆくあいだにおける人間の経歴は、つねに生存し、たえず学んでいく一個の人間と同様に見なすべきである〉⁽²⁷⁾という、感嘆に値する、根本的な名言を吐かせたのである」と述べる。コントが他から直接引用することは稀であるが、ここではパスカルの『真空論序言』(一六五)から直接、引いている⁽²⁸⁾。

コントによれば、科学革命を経て、近代ヨーロッパが古代ギリシヤに対して、自らの優位に気づき始めた、その自覚の最初の表明がこのパスカルの言葉だということになる。『真空論序言』でパスカルは、神学のように古来の「權威」を持ち出して済まず学問と、「推理や実験」によって古来の知を覆して進んでいく自然学とを対比させ、自然学において近代が古代を乗り越えた例として、真空の発見

をあげる。この比較はさらに、近代 vs 古代から人間 vs 動物に広げられ、理性に従い進歩する人間と、本能に縛られ同じ状態にとどまる動物とが対比される。こうして、「先人の経験から利益を引き出す」ということ、つまり進歩が、動物に対して人間を特徴づける当のこととして主張されるのである。科学の進歩を、人間社会の根本的事実として認めたとしたこと、コントがパスカルで評価するのはこのことである。

それに対してデカルトは「先人の経験から利益を引き出す」ことは考えなかったと言える。『方法序説』第二部の喩では、「ただ一人の建築家が設計し完成した建物は、ほかの目的のためにつくられた古い城壁などを利用することによって、多くの人の手でできあがった建物よりも、美しくまた秩序だっているのが常である」とし、「多くの違った人々の意見から少しづつ組み立てられて広げられてきたものと」「良識ある一人の人が、眼の前に現れる事から関して、生まれつき持ち前でなしうる推理」とを比較し、前者は後者ほど「真理に近くありえない」と断じる。この「ただ自分一人」が「我あり」の形而上学につながることは言うまでもない。そしてここから、社会ということでのデカルトの困難も生じてくる。後年のボヘミヤの王女エリザベトへの書簡（一六四五年九月一日付）で、デ

カルトは、神と我と世界の存在に加えて「自らがその一部分である」社会の存在も認め、全体の利害を私の利害より重んじるべきことを説く。ただその際、「節度と慎重」が必要だとして、「一人の人間が、町の他のすべての人々より価値があるとき、町を救うために自らを滅ぼすことは当をえない」と主張する³³。それに対して、自他の価値の比較をどう行うのかと問うエリザベトに、デカルトは続く書簡（一六四五年一〇月六日付）で、自他の価値の正確な比較は困難であるとした上で、「たとえ各人がすべてを自己中心的にはからい、他人に対する慈悲のごときものを持たぬとしても、…通常は、やはり他人のためにも尽くしていることになる、というふうなぐあいには、神は、事物の秩序を打ち立てている」と述べることになる³⁴。神に下駄を預けるわけだが、それは社会を考えることの放棄とも言える。この「見えざる神の手」の主張はしかしアダム・スミスに引き継がれ、その後、陰に陽に自由主義の主張に継承されていく。「進歩」（「科学の進歩」）が視野から外れるとき、我が先立ってきて社会を考えることはできなくなるのである。

デカルトに反対し、パスカルを踏襲するコントの「三状態の法則」は、「進歩」を言うことで、人間社会を考えるものになっている。

第二のパスカルへの言及（『実証哲学講義』第5巻第54講中³³）では、〈我〉が問題とされる。

この箇所でもコントは、「社会の階級秩序（たとえば、君主制）の根本的不完全性」を哲学者はとかく攻撃するが、その階級秩序は通常は「われわれの本性の強く命じるところ」と合致していると指摘した上で、この点でのパスカルの「忘れがたい考察」に依拠しつつ、「社会の調和を日常的に維持するため」には、「このような階級秩序は不可欠であって、代わりに、もしも「精神的優位」（個の優位）とあったもつともらしい原理が持ち出されれば、「和解決しないもろもろの主張」がぶつかりあって、絶え間ない混乱が避けがたくなるだろうと述べる。ここでコントが「パスカルの忘れがたい考察」と呼ぶのは、『パンセ』の以下のような断章である。少し長いが引用する。

「世の中で最も不合理なことが、人間がどうかしているために、最も合理的なこととなる。一国を治めるために、王妃の長男を選ぶとどうほど合理性に乏しいものがあるか。人は、船の舵をとるために、船客の中

でいちばん家柄のいいものを選んだりはしない。そんな法律は、嗤うべきであり、不正であろう。ところが人間は笑うべきであり、不正であり、しかも常にそうであろうから、その法律が合理的となり、公正となるのである。なぜなら、いったい誰を選ぼうというのか。最も有徳で、最も有能な者であろうか。そうすれば、各人が、自分こそその最も有徳で有能な者だと主張して、たちまち争いになる。だから、もつとも疑う余地のないものにその資格を結び付けよう。彼は王の長男だ。それははっきりして争う余地はない。理性もそれ以上によくはできない³⁴」。

「私とはなにか」。∴。だれかをその美しさゆえに愛している者は、その人を愛しているのだろうか。いな。なぜなら、その人を殺さずにその美しさを殺すであろう天然痘は、彼がもはやその人を愛さないようにするだろうからである。そして、もし人が私の判断、私の記憶ゆえに私を愛しているなら、その人は「私」を愛しているのだろうか。いな。なぜなら、私はこれらの性質を、私自身を失わないでも、失いうるからである。このように身体のかなにも、魂のなかにもないとするならば、この「私」というものはいったいどこ

にあるのだろうか。減びうるものである以上、「私」そのものを作っているのではないこれらの性質のためではなしに、いったいどうやって身体や魂を愛することができのだろうか。なぜなら、人は、ある人の魂の实体を、そのなかにどんな性質があろうとかまわずに、抽象的に愛するだろうか。そんなことはできないし、また正しくもないからである。だから人は、決して人そのものを愛するのではなく、その性質だけを愛するのである。したがって公職や役目ゆえに尊敬される人たちを、あざけるべきではない。なぜなら、人は、だれもその借り物の性質のゆえにしか、愛さないからである」。

借り物でない、我の本質、「有能」や「有徳」などが存在することや、また、諸性質の背後に、我なる実体、「私とは何か」が存在することを否定するパスカルのこの議論は、のちにヒュームに継承されるが、諸性質は「公職や役目」ではないにしても、他者も持ちうる社会的なものでしかない。このことからパスカルはより端的に、「ある著者たちは、自分の著作について話す時、「私の本、私の注解、私の物語、等々」と言う。∴彼らはむしろ「われわれの本、われわれの注解、われわれの物語、等々」と

言う方がよからう。というのは、普通の場合、そこには彼ら自身のものよりも他人のものの方が、よけいはいっているからである」と断じることになる。パスカルは我をわれわれ（社会）に解消するのである。

コントは、パスカルのこの我（デカルトの我）の解体を全面的に踏襲し、「個が抽象的なのであって、社会がそうなのではない」と述べる。実在するのは個ではなくて社会なのである。

8

第三のパスカルへの言及（『実証哲学講義』第5巻第55講中）では、〈自然〉（科学）が問題となる。

この箇所ではコントが取り上げるパスカルは、デカルトが一方で科学の推進者でありながら、他方で知識の進歩（動性）を見ずに（生得説を主張）、社会ではなく個（我）に固執したのは、彼が自然の探究において不徹底であったと示唆するパスカルである。

コントはこの箇所でも、より詳しくは、パスカルを次のように見ている。まず、カトリックの陣営にあって、神の存在の合理的証明といったことがどれほど「迂闊なこと」で「危険なこと」であるかを理解していたほとんど唯一の哲

学者がパスカルであった（パスカルの「賭け」の主張）。次に、パスカルは、神の存在証明を「自然現象の秩序」から行おうとすることを「浅はかなこと」と見なし、「自然のさらに突っ込んだ探究は、自然の構成のこの上ない不完全さを、あらゆる面で明らかにしていく」と考えた。最後に、パスカルは、従って、「自然の構成」を「盲目的絶対的に讃嘆する」のではなく、なすべきは、自然の「主要な異なる諸部分」の「実証的な探究」を「時間をかけて」行っていくことだと考えた。

コントがこのように捉えたパスカルは、『パンセ』の有名な「広漠たる中間」の断章におけるパスカルである。ここでは四つの観点から「人間の不釣り合い」（右往左往の状態）が論じられ、四つの容中律のテーゼが示されている。①（宇宙の二つの無限を前に）人間は大きくあることもできないし、小さくあることもできない。②（学問の原理と範囲の二つの無限を前に）人間は学問の究極原理に達することもできないし、学問の全範囲を踏破することもできない。③（疑う理性と肯定する直観の二原理を前に）人間は確かに知ること、まったく無知であることもできない。④（精神と物体（身体）を前に）人間は純粹精神でありえないが、全く物体でもありえない（「すべては物体である」を知るには精神が必要）。人間はこうして精神と物

体の結合でしかありえないが、しかしまさにこの結合こそ人間のもっとも理解しえないことである。

この四つの「不釣り合い」から、③の〈知と無知〉の場合を見れば、一方の〈知の不可能〉については「起源の不明」が言われ、他方の〈無知の不可能〉については「誠実にまじめに話すならば、自然の原理を疑い得ない」が言われている⁴⁰。例えば、夢の懐疑において、一方で、夢の懐疑を破る合理的論証は存在しないが（知の不可能）、しかし、他方で、⁴¹「すべては夢かもしれない」と口を尖らせて論じる人間がいたとして、その人間に「誠実にまじめに話せ」と一喝すればおそらく彼は黙るのである（無知の不可能）。この〈知と無知〉の二つの不可能の間を人間は行き来する。にもかかわらず、この「広漠たる中間」で「無限に高くそびえ立つ塔を築くための究極の不動な基盤を見いだしたい」と願うこと（デカルトの場合）、それをパスカルは「これらの無限をしつかり打ち眺めなかったため」とする⁴¹。このような自然の探求の不徹底、すなわち一種の盲目性からのみ「究極の不動の基盤」を求めるといった試みは生じ、従ってそれは破綻する。「われわれの基盤全体がきしみだし、大地は奈落の底まで裂ける」と言われる⁴²。そしてデカルトも結局は〈知と無知〉の間の右往左往を免れなかったこと（いわゆる「デカルトの循環」）を、パス

カルは指摘する。⁴³

それでは「知も不可能、無知も不可能」というこの状態で、「普遍数学」は論外だとして、そもそも科学はどうなるのか。まず「広漠たる中間」に気づかせるのが、科学の進歩なのであった（「無限をしつかりと打ち眺める」）。しかしそうだとすると、その先はどうなるのか。パスカルはただ「じつとしていろ」言う⁴⁴。そしてそれをコントはすずに見たように、「異なる主要な諸部分」の「実証的な探究」を「時間をかけて」行っていくことと解釈していた。⁴⁵つまり、現象の「諸部分」に「実証的な探求」を差し向け、諸科学を成立させていくという「分類の法則」の主張である。しかし「広漠たる中間」から「分類の法則」にどう至りうるのか。

今ここでこの問題に深入りはできない。実際『パンセ』にはそれとしての科学論はない。ただここでは『パンセ』の社会論を援用し「分類の法則」について一考してみた。『パンセ』では人間の自然状態からの（科学ならぬ）社会の形成が、以下のように論じられている。

「最も強い部分が最も弱い部分を圧迫し、ついに支配的な一党ができるまで、互いに戦い合うだろうことに疑いがない。ただ、それがひとたび決定されると、戦

いが続くのを欲しない支配者たちは、彼らの手中にある力が、彼らの気に入る方法で受け継がれていくように制度を制定する。ある者は、それを人民の投票に、他の者は世襲等々にゆだねる。そして、この時点から想像力がその役割を演じ始める。それまでのところは力が事を強行した。これからは、力が、ある党派のうちに、想像力のおかげで保たれていくのである」⁴⁶。

人間は自然においてだけでなく、社会においても「広漠たる中間」の状態にある。そこには力と正義と言う揺れ動きの二極が存在している。一方で、力だけで社会は作れない。英雄も夜には眠るのであり、制度（不寝番）が不可欠である。そして制度には正義が欠かせない（この立派な方を守るのが私の義務」といった正義感がなければ、不寝番は英雄の首を掻っ切るであろう）。しかし先の「性質」の問題で見たように真の「立派さ」はどこにもない。想像力が働き神話（王権神授説）であれ、民の声は天の声（であれ）が形成されて始めて「正義」、そして制度の維持が図られていく。人間にそもそも正義は不可能である。しかし人間に「正義」（括弧つき）は絶対に必要なのである。こうして想像による「正義」が登場し制度が維持されていく。ここで制度は「君主制」であったり「民主制」であつ

たりしうる（フランスでは貴族たちのうちに、スイスでは平民たちのうちに⁴⁷）。そして、それらの間に優劣は存在しない（君主制が力によるとして、民主制もただ多数と言う力による）。パスカルはそれを「習慣（つまり制度）は、かつては理由なしに導入されたが、理にかなうものになった⁴⁸」⁴⁹と言い表す。出発点にはたまたまの力の優位という偶然しかなかった。それが習慣化され、想像力によって美化され、正当化（「正義」）されて制度となっていく。従って制度は場当たりに複数とならざるをえないのである。詳しい議論が必要であるが、同じように、人間に真理は不可能だが「真理」（括弧つき）は絶対に必要なのであり、やはり場当たりに何らかの習慣（経験）が美化され「真理」になっていく。コントが「分類の法則」で説く科学の多数性は、パスカルの社会論における制度の多数性に重なると考えうる。

こうしてコントは（自然）（科学）に向う「分類の法則」においても、デカルトの「究極の不動の基盤」ではなく、パスカルの「広漠たる中間」に従っているのである。

9

以上から、コントは実証哲学に本質的な（進歩）、（我）

そして（自然）（科学）の主張においてパスカルを踏襲していると言える。コントのパスカル主義、従って、反デカルト主義は本質的なものである。ただ改めて、それは形而上学者デカルトの拒否であって、科学者デカルトの拒否ではなかった。このことについて最後に『方法序説』について語るコントの言葉を引いてみたい。

「この見事な序説において、デカルトは、自分個人の歴史を素材にたどりながら、そうとは知らずに、人間的理性の一般的な歩みを描写しているのである」⁵⁰。

『方法序説』の中でデカルトは確かに歴史を退けている⁵⁰。しかし、コントはこの書そのものが「そうとは知らずに」、歴史、つまり、コントの意味での「社会学」になっていると云うのである。『方法序説』には『幾何学』をふくむ三試論が続くが、デカルトは三試論においてだけでなく、『方法序説』において科学者（社会学者）だったのである。この観点から、コントはデカルトの形而上学についても再解釈を施し、次のように述べる。デカルトはその形而上学（心身二元論）によって、「知性と社会性についての最小限の研究だけを哲学に残し、自余のすべての領域を科学に開放した」⁵¹。あるいはさらに、「この二元論は一方では、時

代への仕方ない譲歩であるが、そのことで、デカルトは、科学に、最終の領域を手掛けるのに必要な力量を養うための自由を与えたのである⁽²⁾。デカルトの形而上学は、科学がまだ不十分な力量しか持ち得ないでいる時代への、デカルトも不本意な、あくまでも科学のために行つた「仕方ない妥協」の産物だつたということになる。科学者デカルトをもち立てるために、形而上学者デカルトをここまで複雑に見ていく必要があるのかどうか躊躇もされるが、『方法序説』が等閑視されがちで、『省察』があれば、デカルトが『方法序説』を仮に書いていなかったとしても構わないといった風のデカルト解釈がまま見られる今日、あくまでも『方法序説と三試論』のデカルトに真価を見ようとするコントのデカルト解釈は、顧みられてよいと考える。

《注》

- (1) 『西周全集』第1巻(宗高書房、一九六〇年) p. 19。なお白文の読み下しは小泉仰『西周と欧米思想の出会い』(三嶺書房、一九八九年) pp. 46-47に拠る。
- (2) Auguste Comte, *Discours sur l'esprit positif*, Paris, Vrin, 1974 (復刻版、初版は一八四四年) p. 1. 以下では *Discours* と略記する。
- (3) *Discours*, p. 76
- (4) 「社会学」という学問も、その名称 (sociologie) もロン

トの創出による。ただその後、今日の「社会学」は様変わりしている。

- (5) Friedrich Nietzsche, *Der Wille zur Macht*, 467 (Kröner) (ニーチェ『権力への意志』下(原佑訳、ちくま学芸文庫、一九九三年) p. 15)。
- (6) Auguste Comte, *Cours de philosophie positive*, 6 Vols (Bruxelles, Culture et Civilisation, 1969. 復刻版で初版は一八三〇—一八四二年) V. 1, p. 19. 以下では *Cours* と略す。
- (7) *Cours*, V. 1, p. 389.
- (8) *Cours*, V. 6, p. 236
- (9) *Cours*, V. 6, p. 654.
- (10) Descartes, *Discours de la méthode*, AT, VI, p. 7. (AT は Adam-Fannery 版全集)。
- (11) *Cours*, V. 1, p. 726.
- (12) *Cours*, V. 2, p. 287.
- (13) *Discours*, p. 18.
- (14) Descartes, *Meditationes*, AT, VII, p. 31.
- (15) *Discours*, pp. 19-20.
- (16) Descartes, *Meditationes*, AT, VII, p. 17.
- (17) Auguste Comte, *Correspondance générale et confessions*, Tomel (Mouton, 1973), p. 37.
- (18) *Discours*, p. 68.
- (19) *Discours*, p. 23
- (20) Descartes, *Meditationes*, AT, VII, p. 24.
- (21) *Cours*, V. 6, p. 666.
- (22) *Cours*, V. 1, p. 148 以下。
- (23) *Cours*, V. 6, p. 654.

- (24) *Discours*, p. 36.
- (25) Pascal, *Pensées*, éditées par Léon Brunschvicg (Garnier, 1964), 78. 数字(ちじう)のBrunschvicg 版での断章番号。以下でも *Pensées*, 78 のように記す。なお以下を含め *Pensées* からの引用の訳文は『パンセ』(前田陽一・由木康訳 中公文庫 一九七三)に依る。
- (26) *Cours*, V. 4, p. 234.
- (27) *ibid.*
- (28) Pascal, *Les Provinciales, Pensées et opuscules divers* (La Pochothèque, 1999), pp. 89-90. 同書に『真空論序言』(Sur le traité du vide. Préface) が収められている。
- (29) *ibid.*, pp. 84-89.
- (30) Descartes, *Discours de la méthode*, AT, VI, pp. 11-12.
- (31) Descartes, *Œuvres philosophiques*, Tome III (Garnier, 1973), pp. 605-609.
- (32) *ibid.*, pp. 619-620.
- (33) *Cours*, V. 5, pp. 309-310.
- (34) *Pensées*, 320-2.
- (35) *Pensées*, 323
- (36) *Pensées*, 43.
- (37) *Discours*, p. 118.
- (38) *Cours*, V. 5, pp. 735-736.
- (39) *Pensées*, 72.
- (40) *Pensées*, 434.
- (41) *Pensées*, 72.
- (42) *ibid.*
- (43) パスカルはデカルトを「ただわすばかり突つかれたた

- けで、何の資格もしめすことができません。つかんでいるものを手放してしまわなければならない「この人間」と痛罵している。 *Pensées*, 434.
- (44) *Pensées*, 72.
- (45) *Cours*, V. 5, p. 736.
- (46) *Pensées*, 304.
- (47) *ibid.*
- (48) *Pensées*, 294.
- (49) *Cours*, V. 6, p. 303.
- (50) Descartes, *Discours de la méthode*, AT, VI, pp. 6-7. 歴史には省略、歪曲が避けられないこと指摘されている。
- (51) *Cours*, V. 6, p. 512.
- (52) *Cours*, V. 3, pp. 770-771.